



カムチャツカの自然と人 —— 激動のソ連を行く ——

九月下旬のアバチンスキー火山

横山 卓雄

はじめに

昨年、ソ連邦ロシア共和国カムチャツカ州で、自然環境現地調査をすることができた。同志社大学山岳会によって行われた「日ソ学術登山」の一部として行われたものである。山岳会は三月に極東地域の最高峰クリチエフスカヤ火山に日本人として初めて、外国人としては戦後はじめて登頂に成功した。

自然科学の学術調査隊は、八月のクーターによって出発が若干延期となったが、九月一日から二三日の間、半島中部の野外調査を行った。日本側隊員は、筆者と工学部の野田純一さん、山岳会の大久保賢一さん(ダイキンプラント株式会社勤務)である。昨年秋季発行の学生向き広報に前半の紀行文をかいたので、ここでは調査の中く後半部を話題にする。

ソビエトの通貨事情

我々がハバロフスクで世話になった人に数十万円の飛行機チャーター代を支払った

ときのことだが、それをルーブルに換えてきてほしいと頼まれた。外国紙幣交換専門の銀行は、レンガ建てではあるがほんの小さな小屋で、中は受付とカウンターがあるだけであった。まず、私が個人用の円をかえてみる。ルーブル約五円である。四カ月前には二五円だったのだから通貨価値が五分の一になっている。

大久保君が頼まれた二〇万円をルーブルに換えた。札束がどんどん出てくる。まさに山積みになった。五〇、一〇、五、三、ルーブルなど、各種の紙幣の束を出してくる。手で持ちきれない。やむを得ず、私のサブザックを使うことにした。中のものをだして大久保君のものに移し、札束を入れた。小さいとはいえずサブザックが一杯になった。

それにしてもソ連における通貨の変動はすさまじい。カムチャツカまでの航空券を買う。外国人は一人約一三〇ドル、約二万円弱である。これも四カ月前には約一万六〇〇〇円であったのだから、約二割強の値上がりである。

もつとも自国人は約九〇ルーブルで、四

〇〇円程度にすぎない。

カムチャツカの少数民族

カムチャツカ半島にはカムチャダール(イテリメン)、エベンヌ、カリヤック(コリヤック)族などの少数民族が生活している。こうした少数民族に対する優遇処置は



エベンヌ族によるトナカイの放牧

数々あるが、合理的といおうか実際のとおうか、日本人には考えもつかない内容をもっている。

カムチャダール族はもともと漁業を、エベンヌ族は遊牧を、カリヤック族は狩猟を生活の糧としてきた。ロシア人と州政府は、それをそのままの形で残すように指導している。

エベンヌ族はトナカイとシベリアビツグホーンの遊牧をしている。夏は二家族ほどの単位で広大な地域にちらばって生活していて、二千頭ほどを管理している。冬になると家畜を自然に帰して、自分たちは都会で冬を越す。春になると放牧地へ出かけて群れを集める。彼らはトナカイが集まってくる場所を知っているので、こういうことが可能なのだ。

トナカイは半野生なのだが、繁殖期の夏に保護されるので頭数が増えていく。増加した分を自分達のためや社会のために利用する。つまり一年に殺す頭数は、増加分だけなので、いつまでも自然の能力に合致した頭数に保たれていくわけである。こうした自然の利用のしかた保護のしかたを、日

本が学ばなければならないとつくづく考えさせられた。

民族の生活スタイルを残しているだけではなく、彼らの収入は、一般のカムチャツカ住民より約五割ほど高い、カムチャツカ州はロシア共和国内部では、約三割給料の高いところなので、少数民族の収入は一般のロシア人の一・五×一・三〇一・九五倍



火山噴出物によって枯れた森林。地表面のハイマツが美しく不気味である。

となる。ただこの制度は共産党一律支配の完全管理社会だからできることで、今回の革命的变化によってどう変わっていくのか、少々心配ではある。

スコリアの原っぱでのスグリ狩り

トルバチク火山の南麓では、一五年前に大規模な割れ目噴火が起こった。今回我々学術隊の受け入れ先となったソ連科学アカデミー極東支部の火山学研究所が総力をあけて観測した結果が本になっていて、彼らにいわせれば「世界の火山学者のメッカ」

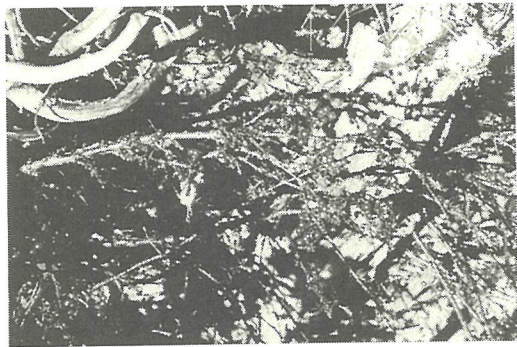


ヤナギラン

この原っぱのほぼつきるところはスコリアの堆積が少なかったため、そろそろ植生が回復し始めている。枯木のスケルトンのまわりにはヤナギランが桃色の花を咲かせ、タンポポの種子に似た白い繊維をつけたタネが風に吹かれて、スケルトンに粘液でまっわりついている。また無数のスグリ（レッド・カレント）

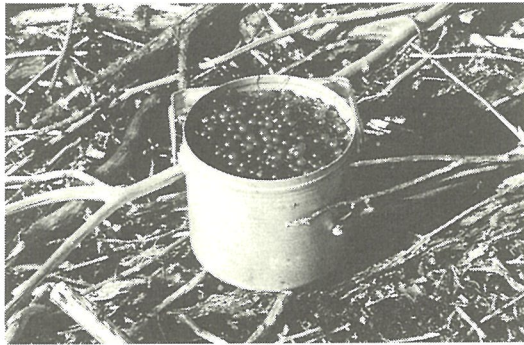
だという。

この火山は大量の玄武岩熔岩を噴出した。それとともに大量のスコリア（塩基性の黒い軽石）が周辺の森林に降った。厚いところでは一〇メートル以上堆積して、植物をほとんど枯らしてしまった。広大な地域がまるで枯木の墓場といった風景を呈している。黒い地表面から真白い枯木が無数につき出ている。ハイマツが葉をおとし、真つ白な枯木となって地面にからみついていたりする。白と黒のモノトーンであり、まったく色彩のない世界で、まさに「あの世」を連想させる。



たわわに実っている「スグリ」

が実っている。高さ一メートル弱の樹木に千個以上実がたわわについている。この日イギリス・ポーランド・ソ連の火山学者たちの共同地殻変動観測キャンプ地で昼食をごちそうになってから出発したが、そこから車に一〇人ほどのつてきた。さあ行こうというので、のつたら二時間ほどでここについたわけである。



枯れ木のスケルトンの上におかれたスグリ、1人分の収穫量である。

野田君と大久保君は喜んでスグリを食べたり、ヤナギランの写真をとったりしている。私は、スコリアと熔岩のサンブルと数枚の写真をとったが、その後することがない、ロシアのメンバーは、大きなバケツをかかえてどこかへ行ってしまった。しかたがないので昼寝をすることにした。日があたってぼかぼかと暖かく快適である。その

まま約二時間が過ぎた。メンバーがぼつぼつ帰ってくる。みんなスグリを大量にとってきている。一人あたりバケツに二杯ぐらいである。わが学術調査隊の隊長であるムラビエフも例外ではない。こんなにとつて食べられるのだろうかかと心配であった。

三々五々帰ってきた人々が集って「チャイニク」である。たき火をしてお茶をわかす。スズで真黒になった大きいヤカンで湯をわかして紅茶をブツコム。それを金属性のコップにいれて、コンデンスマルクをたっぷり加えて飲むのである。

このスグリ狩りには二つの後日談がある。一つは、この大量のスグリが州都のベトロパブロフスク・カムチッキーに持ち帰られて売り物となったことである。ソ連では、他人から物を仕入れてマージンをかけて売ることは禁止されている。資本主義的収奪だという考え方の方である。しかし、自分で作った物は自由市場で売ることができ。山でとってきたものや川で釣った魚も同じあつかいで、このスグリ狩りはメンバーのアルバイトであったのだろう。この原っぱはスグリ狩りの穴場だったのであ

る。

もう一つは野田君の採集したスグリの末路である。このあとカムチャツカ川をボートで下ったのだが、そのキャビンにあった船長の個人用ジャムを我々は全部消費してしまった。そこで野田君が一発発起してスグリのジャムを作りはじめた。登山用ガスバーナーで煮つめて、おいしいジャムがで



火山研究所所有の小ボートのキャビンでお茶を飲む野田(左)、大久保(右)の両君

きた。それを空にしたジャム瓶に入れてきたという。「ちようど一杯になって、もともとより増えましたよ」というのが野田君の言であつた。彼も心優しいところがある。

帰国日のこと

今日はカムチャツカ最後の日である。朝あわただしく用意してアエロフロートの事務所にチェックインへ行つた。

しばらくして場内放送があり、乗客がドーンと騒いでいる。何が起こつたのであろうか。放送によると飛行機の出発は午後七時以降になるという。今は午前九時だから一〇時間以上遅れるという放送だつた。乗客たちは三々五々散つて行つた。我々はホテルをチェックアウトしているので行くところがない。ムラビエフ、ユリー両氏がとにかく火山研究所へ帰ろうというので引つ帰したが、何もすることがない。ムラビエフの提案で午後はアバチンスキー火山へ行くことになつた。この火山は、氷河と火山活動の観察で有名で、一九三八年噴出の熔岩がみられる。



道路沿いの空地での「チャイニク」、日に三回はこういうティータイムがある。

途中元原子力発電所建設予定地を通過した。住民投票で否決されたので建設は中止になつたとユリーさんが説明してくれる。カムチャツカには原子力発電所はいらないよとほがらかに笑っているのをききながら、日本ではこういった住民投票が決して行われないことに気が付いた。共産主義の中にあるこういう住民意志の決定と自由

と言われる日本での個人無視の風潮、ともにそれが現実であることが奇妙である。

約二時間半ほど走ると道がせばまって車の屋根やサイドに樹木の枝があたるようになった。外をみると少しではあるが雪が積もっている。だいぶん高度が高くなっているようで、どこまで行くつもりなのだろうかと思つていると急に車が止まつた。ゆくての道を倒木がふさいで通行不可能である。どうも熔岩の分布地までは行けないらしい。

すこし戻つたところの対岸には岩塊がごろごろしていて、それが一九三八年熔岩だという。若い人々とユリーと彼の息子が、サンプルをとりにいってくれた。

帰る途中、アバチンスキー火山の裾野でムラビエフが個人の保養のために政府から借りているキャンプ地によつた。夏期三カ月ほどで三〇〇ルーブルだとのこと、彼の月給は一五〇〇ルーブルだそうだから、けっこう高い。自然の平地約百坪ほどにテントが張つてあり、玉葱などを栽培している。茶を沸かして飲みだしたので、日本からもつてきた即席メーンやインスタントラーメン

をだしてきて作った。小学生であるユリーの息子がおいしがっているので、残りをあげることにした。ママに食べさせるのだとはりきっていた。

ここからみるアバチンスキー火山は美しい。もう麓まで雪がかかつて真っ白である。今日は雲一つない青空なので本当に素晴らしい。

五時頃になってもいっこうに腰をあげる気配がない。飛行機の時間になりだした。大丈夫かと聞くと、こともなげに時間は充分あると答える。七時に出発するのであれば市内まで一時間半、ターミナルから飛行場まで二〇分だから気がきでない。カムチャツカ州のビザは今日切れるのだ。

市のターミナルには七時すぎについた。出発は九時すぎだという。朝は七時ときいたはずだが、朝から九時だったという、こちらの聞き違いか通訳ミスか不明だが、それなら私が時間が大丈夫かと聞いたときに、九時だと答えればよいのにと少々腹が立ってきた。

しかし考えてみると今日は日曜日である。彼らは、家族サービスを中止して我々

につき合ってくれた。二〇日にわたる野外調査明けの日曜日には解放される予定であったのに大変だったろうと思う。

七時からまた長い間待たされた。その間に同じ飛行機に乗る日本人のパーティーにあった。我々が春の登山でお世話になった旅行会社の諸君が見送りに来ている。代表のパチエフスキー、経理担当のゲオログ氏も来ているので挨拶に行く。大久保君が情報を仕入れてきた。我々の滞在費用は一日あたり一八〇ドルであった。平均月給が三〇〇〇円の国としては高すぎると彼らにずいぶん言ったが「同志社は初めてですから」と言う。「こんなに高いと日本人でも観光にこないよ」というと、今後は少し安くするといっていたが、現在一日あたり二二〇ドルだという、常識はずれといつてよい。政府がすいあげている可能性が高い。

飛行機が出発したのは午後二時半で、ハバロフスクにも時差の関係で同じ時刻についた。

ハバロフスクでは、我々の受け入れ先の旅行会社の人が、通訳とともに待っていてくれた。朝十時から十三時間、カムチャツ

カからの便がつくたびにさがしていたとのこと、火山研究所からは何の連絡もなかったという。ロシア人はのん気なものである。また、我々ののる予定であった便以外のカムチャツカ便はちゃんと着いたとのこと、待っていたほうも、飛行機会社に問い合わせることはできないのだろうか、理解をこえることが多い。

(大学工学部教授)